

福澤諭吉にとっての慶應義塾

教職課程センター 教授
米山 光儀

慶應義塾は、1858（安政5）年に江戸築地鉄砲洲にあった中津藩中屋敷で福澤諭吉が蘭学塾を開いたことにはじまる。当初、その塾は名前もなく、中津藩の江戸藩邸内学校といってもよい存在であったが、その後、塾は中津藩から離れて、1867（慶應4）年に芝新銭座に校舎を構え、慶應義塾と命名された。1871（明治4）年には、三田の島原藩中屋敷跡に移り、後には幼稚舎、大学部も設置され、初等教育から高等教育までの一貫教育を行う学校にまでなり、今日に至っている。

慶應義塾が三田に移転してから数ヶ月後には、文部省が設置され、全国規模で教育政策が展開されるようになり、徐々に学校制度が整えられていくが、福澤諭吉が亡くなる1901（明治34）年までには、4年制義務教育の初等教育、3分岐型の中等教育の制度が整えられた。高等教育の整備については、大正中期を俟たなければならないが、慶應義塾は、政府が教育制度を整える以前から存在し、初期の頃は独自に教育システムを構築することができたが、徐々に政府の教育政策に影響を受けるようになり、それとの緊張関係の下、私学の独自性を追求していかなければならないようになっていく。

慶應義塾を創設し、亡くなるまで深く関わった福澤諭吉にとって、そもそも慶應義塾とは如何なる存在であったのであろうか。福澤の慶應義塾への関わりを見ながら、考えてみよう。

福澤は、開塾当初、その塾を長く続けていこうとは考えていなかった。開塾直後の安政5年11月22日付けの書簡に、「私もいづれ三、四年は滞遊仕り候」とあり、長く江戸に留まる意志がなかったことがわかる。江戸を離れて、福澤が何をしようとしていたのかを知ることはできないが、福澤はその後の海外経験の中で教育の重要性を認識し、結局は江戸・東京を離れず、教育事業を展開することになる。1862（文久2）年に福澤が遣欧使節の一員としてロンドンに滞在していた時に中津藩の用人・島津祐太郎に宛てた書簡が残されているが、そこには「先ず当今の急務は富国強兵にごぞ候。富国強兵の本は人物を養育すること専務に存じ候」とあり、漢学ではなく洋学での人材養成を提言している。そのような認識の下、福澤は塾を芝新銭座に移し、本格的に塾を経営していくことになる。その時に出された「慶應義塾の記」には、「今ここに会社を立てて義塾を創め、同志諸子、相ともに講究切磋し、もって洋学に従事するや、事、もと私にあらず、広くこれを世に公にし、士民を問わずいやしくも志あるものをして来学せしめんを欲するなり」と、塾が福澤個人の塾ではなく、同じ志を持った者が協力して創った塾であること、さらにその塾は「公」の性質を持つものであることが述べられている。そして、18世紀初頭の享保期からはじま

る我が国の洋学の伝統に列なり、洋学による人物養成を行うために、「吾が党の士、相ともに謀りて、私にかの共立学校の制にならい、一小区の学舎を設け、これを創立の年号にとりてかりに慶應義塾と名づ」けたのであった。

『学問のすゝめ』初編は「天は人の上に人を造らず人の下に人を造らず」という書き出しが有名であるが、福澤は人は生まれながら平等であるにも拘わらず、現実には「その有様雲と泥との相違ある」のは何故かという問いを立て、それに対して「学問の力あるとなきとに由ってその相違も出来たるのみ」と答える。そして、学ぶべき学問の内容について、福澤は「専ら勤むべきは人間普通日用に近き実学なり」という。その実学は「いずれも西洋の翻訳書を取調べ、大抵の事は日本の仮名にて用を便じ」とする一方で、「年少にして文才ある者へは横文字をも読ませ、一科一学も実事を押え、その事に就きその物に従い、近く物事の道理を求めて今日の用を達すべきなり」という。『学問のすゝめ』5編は、慶應義塾で福澤が明治7年1月1日に述べた^{ことば}詞であるが、ここでは「国の文明は上政府より起るべからず、下小民より生ずべからず、必ずその中間より興り」とし、慶應義塾が「数年独立の名を失わず、独立の塾に居て独立の気を養」って、「今我国において彼の『ミズルカラス』の地位に居り、文明を首唱して国の独立を維持すべき者」を輩出してきたことを誇らしい思いで語っている。

以上から、慶應義塾は洋学によって、「ミズルカラス」＝ミドルクラスの人物を形成していくことをめざしていたことがわかる。洋学の内容は、翻訳書でも学ぶことはできるが、「文明を首唱」する人物を養成する慶應義塾では原書による教育が行われたのである。

しかし、「独立の塾」である慶應義塾の経営は容易ではなかった。公費生制度や徴兵特典を官立学校に限るなど、文部省直轄学校に有利な政策が展開されていたこともあり、明治10年代初頭には、慶應義塾は財政難に陥り、福澤は1880（明治13）年9月には廃塾を決意する。しかし、慶應義塾で学んだ人々が慶應義塾維持法案を定め、塾を維持していくことになる。慶應義塾は、そこで学び、志を同じくする人々の協力によって、維持されていたのである。

その後も、慶應義塾の経営は必ずしも安定的だったわけではないが、1886（明治19）年の帝大学令により設置された帝国大学に匹敵するような専門学を学ぶ大学部を1890（明治23）年に創設するなど、時代の変遷の中で新たな試みを展開している。しかし、大学部は当初の予想よりも学生が集まらず、1896（明治29）年には慶應義塾の最高議決機関である評議員会で大学部廃止が取り沙汰されるが、福澤は大学部存続の必要を訴え、1978（明治31）年には、それまでそれぞれ独立した教育課程を有していた幼稚舎、普通部、大学部を統合し、大学部を中心とした一貫教育の制度を確立し、徐々に大学部への入学者が増えていくことになる。

ちょうどその頃、『福翁自伝』が公表されるが、そこで福澤は自らの人生を「大願成就の人生」といい、現状にたいへん満足していたようにみえる。しかし、最晩年の1900（明治33）年の夏頃に福澤は、慶應義塾を廃塾する意向を身近な人たちに伝えている。同年2月

に「独立自尊」を理念とした 29 条からなる「修身要領」というモラル・コードが発表されるが、彼はその普及のために慶應義塾の土地を売却し、その資金を用いようとしたのである。

洋学によって「文明を主唱」するミドルクラスの独立の人物養成をめざした慶應義塾は、いくつかの経営の危機を乗り越えて、存続してきた。福澤が廃塾を覚悟した時もあったし、福澤が廃塾を覆した時もあった。しかし、福澤が最晩年に慶應義塾を廃塾して、「修身要領」を普及させようとしたことの意味は考えられなければならない。

福澤が 1877（明治 10）年に三田演説会で使った「社会教育」という言葉は、「社会教育」の用例の嚆矢とされるが、福澤は慶應義塾で学校教育を展開するとともに、学校外での教育にも熱心であった。たとえば、彼の代表的著作である『文明論之概略』は、1878（明治 11）年に慶應義塾内に設けられた講義所で公開講義が行われている。また、慶應義塾以外の福澤の三大事業とされる「知識交換世務諮詢」を目的とした交詢社も、日刊新聞・『時事新報』も一種の社会教育であったと見てよい。『福翁自伝』の最後には、「私の生涯の中に出来してみたいと思うところは、全国の男女の気品を次第々々に高尚に導いて真実文明の名に恥ずかしくないようにすること」とあり、それが「修身要領」の普及運動となったと考えられる。

福澤にとって、慶應義塾は人物養成の重要な拠点であったことは間違いない。しかし、一方で福澤は必ずしも慶應義塾の存続に拘っていたわけではなく、その時々で必要な教育の展開を考えていたと見てよい。それが時には存続を主張する、別な時には廃止を主張するという異なった対応となってあらわれたと考えられる。福澤にとって重要であったのは、慶應義塾の存続ではなく、近代日本に必要な教育の実現であったのである。

（注 文中の引用にあたっては、岩波文庫の『学問のすゝめ』、『福翁自伝』、『福沢諭吉教育論集』、『福沢諭吉の手紙』を用いた。）